「うん……」
膨らみの真ん中で花が開く。先程までぽってりと柔らかかった花芯も今は親指によって存在を露わに示してそそり立つ。きめ細やかな肌には潤いが宿り、躯の温度が急速に上昇していく。
右、そして今度は左。
湯を掛けては躯の敏感な箇所を揉み解し、特に赤く染まった箇所を重点的に手で撫でては洗う。上半身をくまなく洗うと、彼女に背を向けるように指示をする。
「ごめん、背中にもお湯を掛けてあげるよ。寒かっただろう」
彼女は従順だった。
「ううん、大丈夫よ」
湯を何度か掛け、手で肩を揉む。指で揉み解し、彼女が少しでもリラックスできるようにと配慮してみるが、僕らの間にある妙な緊張感は消えることはない。
まあ、確かに奇妙な状況だった。
貸切の露天風呂で背中を洗い合うことを必ずしも期待していた訳ではないが、突然訪れた幸運に僕は心から満足していた。
「ジョーは寒くない？今度は私がお湯を掛けてあげるわ」
突如として意識を過ぎる声。
「こっちにも桶はあるのよ」
彼女は手を伸ばして湯を掬う。
「僕は大丈夫。一応、全部洗ったし。フランソワーズ……自分で洗ってごらん」
「え？」
一刻ほど前に酌み交わした酒の余韻か、温泉の濃厚な匂いに刺激されたのか、僕はやや無責任な発言をあえて試みた。彼女が驚くのは十分に分かっていたし、それに少し意図もした。いろいろと……あの、言えないことを。
「洗うって……」
「ここ」
彼女の背中との距離を詰めるため、触れ合う寸前の距離まで近づくと、両腕を両脇の下から差し込んで、両手で彼女を捕まえる。そのまま、背後から躯を密着させると強く抱き締める。
「ジョ、ジョー……？」
ピクンと敏感に反応する肌の滑らかさを存分に堪能すると、僕は右手を下へと伸ばし、そして左手も同じ方向へと伸ばす。両手がそれぞれの場所へ達した瞬間、僕は彼女の柔らかい太腿をそっと撫で、クイっと左右に軽く開いた。
「やだ……」
「やだじゃない。このままだと温泉に入れないよ」
時間を省みずに愛し合った余韻は彼女の下腹部を濡らしている。だから、僕は指先を沈め、彼女を諭す。
「じゃあ、お湯を掛けて。洗うから……」
「ジョーの……は、洗って」